

戒嚴令・正義の人びと

カミュ全集 5

編集／佐藤 朔・高島正明

新潮社版

AC カミュ全集5

Œuvres Complètes d'Albert Camus, Tome V

Original Copyright : ÉDITIONS GALLIMARD

This book is published in Japan by arrangements with
Gallimard through the Bureau des Copyrights Français.

印刷 1973年1月1日 発行 1973年1月5日

発行者 佐藤亮一

翻訳者 大久保輝臣 白井健三郎 高山鉄男
田中淳一 古屋健三 森本和夫 若林真

装幀者 高松次郎

発行所 株式会社 新潮社 〒162 東京都新宿区矢来町71
電話東京(03)260-1111(大代) 振替東京808

印刷所 二光印刷株式会社

製本所 神田加藤製本所

定価850円

〈乱丁・落丁本はおとりかえいたします〉 Printed in Japan 1973

《目次》

戒厳令	大久保輝臣訳	5
正義の人びと	白井健三郎訳	91
著者のことば	白井健三郎訳	152
心優しき殺人者たち	白井健三郎訳	153
〔文芸評論、時事論文、その他小品〕		
シモーヌ・ヴェイユ『根をもつこと』紹介文	高山鉄男訳	165
序文のための草稿	高山鉄男訳	166
「カリバン」誌への手紙	高山鉄男訳	168
ブラジルのマクンバ	田中淳一訳	169
アンドレ・ジッドとの出会い	若林 真訳	174
エマニユエル・ダステイエ・ド・ラ・ヴィジュリーへの二通の返事	森本和夫訳	180
正義と憎悪	古屋健三訳	197

反抗に関する手紙	古屋健三訳	209
日本の作家への手紙	高山鉄男訳	253
三つの会見記	高山鉄男訳	254
パリの沈黙	高山鉄男訳	265
サンパウロ「デイアリオ」紙のための会見記	高山鉄男訳	266
アルベール・カミュ会見記	若林 真訳	268
私の知るもつとも美しい職業の一つ	高山鉄男訳	277
解題		280

カ
ミ
ユ
全
集
5

戒

嚴

令

三部よりなるスペクタクル

ジャン＝ルイ・バローに

初演

一九四八年十月二十七日

マドレーヌ・ルノー、ジャン・ルイ・パロー劇場

マリニー劇場（シモンヌ・ヴォルテラ主宰）

音楽 アルチュール・オネガー

装置・衣裳 パルチユス

演出 ジャン・ルイ・パロー

配役

ベスト ビエール・ベルタン

女秘書 マドレーヌ・ルノー

ナダ ビエール・ブラスール

ヴィクトリア マリア・カザレス

判事 アルベール・ムディナ

判事の妻 マリ・エレーヌ・ダステ

アイエゴ ジャン・ルイ・パロー

総督 シャルル・マユ

席首助役

レジス・ウータン

エレオノール・イルト

シモーヌ・ヴァレール

ジャン・ドゥザイ

クリスチアヌ・クルーゼ

ジャンヌ・ヴァンサル

ジャン・ドゥザイ

ジャック・ベルチエ

ポーシャン

ガブリエル・カタン

ジャン・ビエール・グランヴァル

ベルナール・ドゥラン

ジャン・ジュイヤール

ローラン・マルコム

ウイリアム・サバチエ

ビエール・ソニエ

ジャック・ガラン

マルセル・マルソー

町の女たち

町の男たち

衛兵たち

死体運搬人

まえがき

一九四一年、パローはベスト伝説を主題とするスペクタクルの上演を思い立ったが、これは以前アントナン・アルト(二)も試みようとしたものである。その後何年か経って、それにはむしろダニエル・デフォーの名作『疫病流行記』(三)を脚色するほうが簡単であるようにパローには思われた。そこで彼は演出台本の下書きを作ったのであった。

ところが一方、わたしのほうでも同じ主題の小説を発表しようとしていた。パローはそれを知ると、彼の下書きを土台に對話を書いてみるようにと申し入れてきた。わたしには別の考えもあったし、とくに自分としてはダニエル・デフォーを翻案するのはやめて、パローの最初の構想にもどるほうがいいように思われた。

要するに、一九四八年のすべての観客にとって理解できるような伝説を考えだすことが問題だったのである。『戒

厳令』はこのような試みの具体化であり、わたしとしてはこれが人びとの関心を惹くに値するものだとしても思っていたのである。

しかし――

(一)それについてどのようなことが言われたにせよ、『戒厳令』はいかなる程度においてもわたしの小説の脚色ではないことは明らかにはずである。

(二)これは伝統的な構成をもつ戯曲ではなく、一つのスペクタクルなのであり、またその明白な意図は、抒情的な独白から群衆劇に至る、黙劇や単なる對話や笑劇や合唱なども含めた、演劇表現のあらゆる形式をまぜあわせることである。

(三)台詞のすべてをわたしが書いたことは事実であるが、それでもパローの名前はわたしの名前に当然併記されるべきであろう。それが実現されなかったのは、わたしにも尊重すべきであると思われたいくつかの理由があったからである。しかしなお、わたしにはジャン＝ルイ・パローに負い目があるということをはっきりと述べておきたい。

一九四八年十一月二十日

第一部

プロローグ

警報のサイレンを思わせるようなけたたましいテーマの序曲、幕があがる。舞台はまっ暗闇。

序曲は終るが、警報を思わせるテーマだけは、遠くうなるように、まだつづいている。

突然、舞台の上手奥に彗星^{ハヤブサ}が現われ、ゆっくりと下手に向って移動する。

彗星の光がスペインの城塞都市の城壁と数人の人物を影絵のように写しだす。その人びとは観客に背を向け、彗星のほうへ首をのびしたままじつと身動きもしない。四時が鳴る。人びとの話し声はぶつぶつぶやいているようで、ほとんど意味が聞きとれない。

——この世の終りだ！

——まさか！

——この世が亡びるとすりゃ……

——平気だよ！ この世は亡びたってスペインは亡びな

51

——スペインだって亡びるさ。

——さあ、ひざまずけ！

——彗星だ、災厄の星だぞ！

——スペインは亡びない、スペインは亡びるもんか！

二、三の顔が振り向く。一人二人が用心しながらそっと位置をかえるが、やがてすべてはまたじつと動かなくなる。そのとき例のうなりがいつそう烈しく、かん高くなり、はつきりとした威嚇の言葉のように、音楽的に拡がる。同時に、彗星はけたはずれに大きくなる。だしぬけに、すさまじい女の悲鳴が起ると、とたんにびたりと音楽がやみ、彗星は普通の大きさにもどる。女は喘ぎながら逃げ去る。広場がざわめきだす。対話はいっそうけたたましくなり、前よりもよく聞きとれるが、でもまだはつきりとはわからない。

——こいつは戦争の前ぶれだぜ！

——さつとそうだ！

——前ぶれなんかじゃありゃしないよ。

——場合によりけりさ。

——うるさい。単に暑さのせいだよ。

——うん、カジスの暑さってやつさ。

——もういい、わかったよ。

——やけにうるさいなあ。

——これじゃ耳がつんぼになる。

——呪いがかかったんだよ、この町に！

——おい、カジス！ この町に呪いがかかったんだ！

——しーっ、静かに！

人びとは再び彗星をじっと見つめる。すると今度ははつきり
と、町の保安隊の士官の声が聞える。

保安隊の士官 みんな家に帰れ！ おまえたちは見たもの
を見た、それで十分。なんでもないのに騒ぎたてているだ
けだ。いくら大騒ぎを試みて、結局は骨折り損のく
たびれもうけ。要するに、いつになつたつてカジスはカジ
スなのだ。

一つの声 それにしたって、こいつはなんかの前ぶれさ。

なんでもないのに前ぶれがあるかよ。

一つの声 ああ神さま、偉大で怖ろしい神さま！

一つの声 じきに戦争がおっばじまるんだ、こいつがそれ
の前ぶれだよ！

一つの声 いまだき前ぶれなんか信じるやつがいるかい、
この間抜け！ 幸いに、人間はもっとずっと利口だよ。

一つの声 そうさ、そうしてるうちに首をばっさりやられ

ちまう。豚みたいにばかだつてのが人間の正体で、豚はし
め殺されるのが関の山よ！

士官 みんな家に帰れ！ 戦争はおれたちの仕事だ、おま
えたちの出る幕じゃない。

ナダ まったくね、そうあって欲しいよ！ ところがどう

だ、士官さんたちは寢床のなかでぬくぬくと往生するけど、
剣でぐざりとやられるのはこちとらなんだ！

一つの声 ナダだ、ナダがきたぞ、あのばかが！

一つの声 おい、ナダ、おまえなら知ってるだろう、こい

つはいつたいたいなんの前ぶれなんだ？

ナダ (不具者である) おれの言うことをおまえさんたちは
聞きたがらない。どうせ笑いとばすだけだろう。そっちの
学生さんにも聞くんだね、じきに博士になるんだから。
こちとらはこの酒瓶でもおしゃべりをしてるよ。

ナダは酒瓶を口もとに持っていく。

一つの声 デイエゴ、こいつはいつたいたいどういうことだい？

ディエゴ どうだつていいだろう？ しつかりと気をたし
かに持てば、それでいい。

一つの声 士官さんに聞いてみるよ、どう思ってるか。

士官 おまえたちは公共の秩序をみだしている、これが保

安隊の見解だ。

ナダ のんきなもんだ、保安隊は。考えることが単純だよ。
ディエゴ ほら見ろ、またはじまった……

一つの声 ああ神さま、偉大で怖ろしい神さま！……

再び例のうなりが聞えだす。彗星がまた通りすぎる。

——やめてくれ！

——もうたくさんだ！

——おい、カジス！

——うなってやがる！

——きつと呪いが……

——この町に……

——しーっ、静かに！

五時が鳴る。彗星が消え、夜が明ける。

ナダ（車除けの石に腰をおろして、嘲笑う）さてと！ ではひとつ、このおれさまが、知恵と教養にかけてはこの町の光ともいへべきこのおれだが、すべてを見くだし、名譽とやらを嫌いぬくあまりへべれけに酔っぱらい、輕蔑の自由を持ちつつけたばかりにかえって嘲られているこのナダが、今さっきの花火につづいて、これから諸君に無料^{タダ}で警告を

進呈するでしょう。ではひとつお知らせしとくが、われわれはもう身動きがとれないし、今後はますます動けなくなるんだ。

いいかね、われわれはとくに身動きがとれなかったのだ。だがそれに気がつくには、一人の酔っぱらいが必要だった。そこで、いったいわれわれの現状はどうなのか？ そいつを見抜くのは、おまえさんたち、まともな人種やることだ。こちとらの意見はどうの昔にきまっているし、それをいままさら変える気にはなれない。つまり、生の値打ちは死の値打ちに等しく、人間とは火あぶりの刑に使われる薪^{まき}なのだ。いいか、おまえさんたちはもうじききつと厄介な目に会う。あの彗星は災難の前ぶれだ、警告のしるしなんだ！

まさかだつて？ そうくるだろうと思っていたよ。三度三度の飯を食い、きっちり八時間だけ働いて、女房と妾^{めかけ}の二人も養つてりや、万事は順調だと思ひこんでやがる。とんでもない、順調どころかおまえさんたちは行列のなかにいるんだ。のほほんとした顔つきで、きっちりと整列して、災難のお出迎えをしてるってわけさ。さて諸君、これで警告は終つた。おれはもう良心にやましいところは無い。あとのことはおまえさんたちがいくらか心配したつては

じまらないよ、あの天の上でだれかさんが考えていてくれる。もつともこれがどういふ意味かはご承知のとおり。とにかく相手はとても一筋縄じゃいかないからな。

判事力サド もうやめろ、ナダ、神を冒瀆するのには。昔からの悪いくせだぞ、神をないがしろにするなんて。

ナダ これはしたり、判事さん！ あつしがいつ神さまのことなんかしゃべりましたかい？ 神さまのすることならどっちみちあつしは賛成なんだ。こう見えてもあつしはあつしなりに裁いてるんでね。ものの本で読んだっけが、神さまの餌食になるよりはぐるになつたほうが利口だよ。それにだいいち、神さまなんてやつつける値打ちがあるものかねえ。人間どもが少しでもかつとなつて果しあいでもやらかそうものなら、神さまだつて引き際は心得てるんだし、てんで素直なもんでさあ。

判事力サド おまえみたいな不信心者がいくらもいるから神罰がくだるのだ。たしかにあれは神罰のお告げにちがいないからな。だが、神罰はすべて心の墮落した者の上にくだるのだ。この上さらに怖ろしい結果がつづかぬよう、みんな恐れかかしてむがいい。そしておまえたちの罪をお許しくださいよう、神さまにお祈りするがいい。さあ、ひざまずけ、ひざまずけと言ったら！

ナダを除いて、一同はひざまずく。

判事力サド おい、ナダ、恐れるがいい、ひざまずくのだ。ナダ そうしたくてもできないんでさ、膝がまがらないんだから。恐れるといたつたつて、こちとらはなにもかも覚悟の上なんだ、いちばん厄介な、あなたのお説教だつてね。

判事力サド ろくでなし！ だとすると、おまえはなんにも信じちゃおらんのか？

ナダ なんにも信じちゃいないさ、この世のものは。ただし、酒だけはべつだがね。それにあの世のものだつて、なんにも信じちゃいないよ。

判事力サド 神さま、どうかこの男をお許しください、なにを言っているのか自分でもわかっていないのでございませう。そしてどうかこの町を、あなたの子供たちを、災厄からお守りください。

ナダ かくて、ミサは唱えられたりか。おい、デイエゴ、おれに一本おどれよ、彗星じるしのついたやつでも。そしてどうだ、ひとつ聞かしてくれんかい、おまえのいろいろとはどんな具合か。

デイエゴ ナダ、ぼくは判事の娘と結婚するんだぞ。だから、これからはもう彼女の親爺さんを侮辱しないでくれ。

そいつはぼくを侮辱するのとおんなじことだぜ。

ラッパが鳴り響く。衛兵たちに囲まれて、伝令使が登場。

伝令使 総督府命令。各人は退去して、それぞれの仕事に復帰すべし。よき政治とは、その支配下になにごとも起らぬことをもって最上とする。ゆえに総督は、その支配下になにごとも起らぬことを強く要望するものである。かくして総督の政治は、従来同様、今後もよき政治たりうるであらう。親愛なるカジスの住民諸君、したがって本日はなにごとも起らなかつたのであり、怯えたり慌てたりする必要はまったくない。それゆえに各人は、今朝六時以降、いかなる彗星が当市の空に現われたにせよ、それは誤報と見なす義務がある。この決定に違反する者、過去または未来の単なる天体現象として語る場合を除き、彗星についてとかくの噂を撒きちらす者は、すべて法の定めるところにより厳罰に処せられるものとする。

ラッパが鳴り響く。伝令使退場。

ナダ なるほどねえ！ おい、ディエゴ、どうだい、こいつは？ まったくうまい思いつきじゃないか！

ディエゴ ばかばかしい！ うそをつくのはいつだってば

かばかしいよ。

ナダ いやちがう。こいつがつまり政治ってものさ。おれはこいつに賛成なんだ、こいつの狙いはなにもかも抹殺しちゃおうってことなんだから。やれやれ、まったくごりっぱな総督閣下だよ！ 予算が赤字になりや、そんな赤字は消しちまう、女房に間男されても、濡れ場はなかつたことにしちまう。寝取られても女房は貞淑だし、中風病みでも歩けるといいうわけさ。だからおまえさんたち、あき盲目の目を大きく開けてじっと眺めろ、いよいよ真理の現われるときがきたんだ！

ディエゴ 不吉なことを言うもんじゃないよ、利口ぶって。真理の現われるときってのは、つまり殺されちまうときだらう！

ナダ そのとおり。世界なんかくたばつちまえた！ じつさい、目の前で全世界を抑えこんでやれたらなあ！ そいつはまるで牡牛みたいに、足をぶるぶるふるわせて、細い目は憎しみに燃えたぎり、赤い鼻面はよくれたレースそっくりに、だからだれをたらししているんだ！ ああ、考えただけでぞくぞくする！ こんなに老いぼれたおれの腕だって、ためらったりするもんか。一刀両断、背骨までもばっさりと断ち切る、とたんに畜生のどっしりした図体が

ばかりと倒れ、それこそ時間の尽き果てるまで、無限の空間を落ちつづけていくんだ！

ディエゴ あんたはね、あんまりものごとを軽蔑しすぎるよ、ナダ。その軽蔑はもっと節約しとかなきや。いずれ必要になるときがくる。

ナダ おれにはなんの必要もないさ。おれはとことんまで軽蔑しきる。そしてこの世のどんなものでも、王さまだろうが、彗星だろうが、道徳だろうが、けっしておれを打ち倒すことはないんだ！

ディエゴ まあ落ちつけ！ そんなに威張るなよ。傍^たの人に嫌われちまうぜ。

ナダ おれはあらゆるものの上にいるんだ、とにかく欲しいものはなにもないんだから。

ディエゴ だれだって名誉の上には立てないよ。

ナダ なんだい、坊や、その名誉とやらは？

ディエゴ ぼくをしっかり支えているものだ。

ナダ 名誉なんてものは、過去または未来の天体現象にすぎないさ。抹殺しちまおうぜ。

ディエゴ いいようにしろよ、ナダ。ところでぼくはもう行かなきゃならない。彼女が待っているんだ。というわけでね、ぼくはあんたの予言するような災厄なんか信じない

のさ。ぼくは幸福になるよう努めなければならぬ。こいつは根気のいる仕事だし、そのためには町も田舎も平和でなければ困るんだよ。

ナダ 坊や、とつくにそう言つたじゃないか、おれたちはもう身動きがとれないんだって。なんにも希望は持たないほうがいい。いよいよ芝居がはじまるんだ。世界がとうとうくたばろうとしている。そのお祝いに、ひとつ市場へ駆けつけてちよいと一杯やりてえところだがね、果してそんなひまがあるかどうか。

すべての照明が消える。

プロローグの終り

照明がつく。舞台のすべてが活気づき、人びとの動作はより活発になり、動きがすばやい。音楽、商人たちが店の罫戸を下ろすと、舞台前面が背景からくっきりと浮んで、市場の開かれてゐる広場が現われる。漁師たちの率いる民衆のコーラスが喜びの声をあげながら、徐々に広場を埋めていく。

コーラス なにごとくも起っていない、これからも起るまい。さあ、冷たいものはいかがかな、冷たいものは！ 災厄なんぞはありやしない、豊かな夏が来ているのだ！ (歓喜の叫び) 春が終つたそのとたんに、早くも夏がやってきて、その金色のオレンジが全速力で空に照り映え、季節の絶頂によじのぼる。熱れきつてはじけると、スペインの国の頭上にとつと蜜を降りそそぐ。そしてかたわら、ねっとりとする葡萄だの、バター色のメロンだの、血の詰ったいちじくだの、燃えるようなあんずだの、この世におけるすべての夏のすべての果物が、いちどきにこの市場の店先めがけてどつと流れこんでくる。(歓喜の叫び) おお、果物たち！

野山から柳籠に揺られ、大急ぎで運ばれる長の道中を、いまこの町で終えるのだ。はじめは野山で、暑さに青い牧場の上、陽光のあたる無数の泉が涼しげに湧きでるなかで、水気と甘味に重くなりだす。湧きでる水は徐々に集まり、やがては一条の若々しい流れとなり、根や幹に吸いとられ、果物の心臓にまで送られて、ついにはそこで、尽きない蜜の泉のようにゆっくりと流れて果物をふとらせ、ますますずしりと重たくさせる。

それは重く、ますますずしりと重くなる！ そしてとうとう、あまりの重さに堪えかねて、空から水の奥底に沈みこみ、生いしげる草のあいだを転がりはじめ、川の流れに乗り、道という道に沿って進み、あちこちで群衆の喜びのざわめきと夏のラッパの響きに迎えられ(短いラッパの響き)、群をなして人間の町へやってくる。果物こそかぐわしい大地の証、豊作の約束を常にたがえぬ養いの空の証なのだ。(いっせいに歓喜の叫び) そう、たしかになにごとくも起っていない。このとおり今は夏、天からの授かりもののこの時期が、災厄なんかであるものか。冬がくるのもっとあと、パンが固くなるのもまだ先のこと！ 今は色とりどりの魚の季節、鯛や鰯や海老など、おだやかな海から採りたての新しい魚、それにチーズ、まんねんろう入りのチーズがど